

『少女の誘惑2』

カル＝ウィルは公国騎士の立場を利用し、別荘の外れにある建物への出入り状況と、捕らえられている犯罪者について調べていた。

罪人については、公国騎士にも伏せられており、詳しい事はわからなかったが、古くからこの屋敷で働く召使い達とも親交を持ち、離れの館の規模や、捕らえられている罪人の人数程度の情報を得ていた。

この館は2階建てだが、地下室もあるとのことだ。

騎士団が担当しているのは地上階のみ。囚人数は20人前後。

魔力を封じる結界は、地上階のみに張られており、ここでは魔法具の使用もできない。

ただ、結界の効力は地下には及んでいないらしい。

その日は、誘拐事件が発生したため、外れの館の警備には誰もついていなかった。

館への入り方は知っている。出る時に必要な開錠方法も、立场上知っていた。

そっと館へ入り込んで、ランプに明かりを点すと、目的の部屋へと向かった。

警備を担当した時、

『怖くて、寒くて仕方ないの。人の温もりが欲しいの……』

そう懇願してきた少女の部屋に。

カルは静かにその部屋のドアをあけた。

そっと部屋に入り込んで、寝ていた少女の顔をランプで照らす。

「……ん……あ」

目を覚ました少女が、身を起こした。

「来て、くれたのね」

10代半ばくらいの、長い銀髪の華奢な少女だった。

彼女は足を、鎖で繋がれていた。

カルは彼女を連れだすつもりだったが、その鎖を外す手段がなく、出来そうもなかった。

「君の名は？ 何故ここに？」

「……サーナ・シフリアン。神殿で働いていたの、洪水で気が動転して皆に迷惑をかけてしまった」

「君をここから連れ出そうと思っている」

「私をここから出してくれるの？」

キィィ、ドサツ

物音に2人が振り向くと、軽く開いたドアの先に、貴族の青年——ロスティン・マイカンの姿があった。

「あ、あはははは……ごきげんよう、お嬢さん。俺も混ぜて欲しいなあなんて、いやいや日を改めた方がいいかな、さいならー！」

ドタドタとロスティンは走っていった。

「あれ？ 開かない、なんでだ、クソーツ」

玄関のドアと格闘する音が聞こえる……。

ため息をついて、カルは少女を見た。

「次に来る時までには方法を考えておく」

「来月、大掃除があると思うの。この部屋の掃除の時、この鎖外されるから……。他にも、私を連れに来てくれる人いるかもしれない。その時、一緒に」

カルは再会を約束すると、部屋を出て鍵をかけた。

鍵をもとの場所に戻して玄関に向かう。

「違うんだ、決して逢引を覗きにきたんじゃないなくて、人手が足りなそうだから手伝いにきただけで、でもさっきのあの子可愛かったとかそんなことはどうでもよいッスねはははははは」

ロスティンが慌てた様子で言う。

「私も、ランプの油を足しに来ただけだ」

カルは平然とドアを開け、ロスティンと共に外へ出た。

「そうですよねー。それでは、おやすみなさい！」

ロスティンはバタバタと、本館の方へ駆けていった。

こちらのリアクションは以下の方に発行されています。

カル＝ウィル